

# 原文復元法について

## On the Retranslation Method

都市教養学部人文・社会系  
国際文化コース 欧米文化論分野  
越 朋彦

### 1. はじめに

「原文復元法」とは、英語学者の渡部昇一（1930-2017）がベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin, 1706-90）の『自伝』（*Autobiography*, 1818）からヒントを得て編み出し、『続・知的生活の方法』（1979 年）の中で紹介している英作文練習法である。

本稿ではまず、フランクリンと渡部のテキストに即して原文復元法について解説し、続いて筆者自身の実践例（「新・原文復元法」）を紹介する。そうすることで、現在の英語教育の英作文指導では軽視されがちなインプットのための手段としてこの方法が有効であることを提案したい。そして最後に、首都大学東京の授業「英作文 I」における原文復元法の導入例を報告する。

### 2. 原文復元法とは何か

#### （1）フランクリンの文章修行

フランクリンは、文学者としての彼の名を不朽にした『自伝』の中で、自らが少年時代に行った文章修行について述べている。『自伝』のこの箇所は、フランクリン研究では必ずしも大きく取りあげられてきたわけではないが<sup>1</sup>、「書くこと」が「身を立てる上での主要な手段」（“a principal Means of my Advancement”）（578）<sup>2</sup>であったと認めるフランクリンにとって、文章力向上のために費やした時間と努力は、自己形成の過程における最も重要な要素であったと言っても過言ではない。

『自伝』第一章で要の位置を占める、この文章修行に関するエピソードは、フランクリンが兄ジェームズの印刷所で年季奉公をしていた十代初めの時期（1718 年から 1720

---

<sup>1</sup> 例えば、次の二冊の評伝は『自伝』の文章修行のエピソードに全く触れていない。Ronald W. Clark, *Benjamin Franklin: A Biography* (Random House, 1983); Edmund S. Morgan, *Benjamin Franklin* (Yale University Press, 2002). 概説的な Carla Mulford ed. *The Cambridge Companion to Benjamin Franklin* (Cambridge University Press, 2008) も同様である。

<sup>2</sup> 『自伝』からの引用は全て以下の The Library of America 版により、ページ数を括弧内に示す。Benjamin Franklin, *Autobiography, Poor Richard and Later Writings*, ed. J. A. Leo Lemay (New York: Literary Classics of the United States, 1987).

年頃)<sup>3</sup>に属する。当時フランクリンには、自分と同じく本好きで議論好きの、ジョン・コリンズという親友がいた。二人は様々な問題について議論を戦わせるのを常としていたが、ある時、女性と学問という論題をめぐって何通かの手紙をやり取りし、自説の主張と相手への反論を繰り返すということがあった。その手紙の一部をたまたま目にして読んだ父親から、フランクリンは自作の文章の講評を受けた。父親の評価はかなり厳しいもので、「表現の簡明さ」(“Elegance of Expression”)、「理路整然さ」(“Method”)、「明快さ」(“Perspicuity”) (579) において、フランクリンは相手よりも遥かに劣っているとされた。父の批評の公正さを受け入れたフランクリンはこの出来事をきっかけに、「文章の書き方にいっそうの注意を向け、向上に励むことを決意した」(“I...grew more attentive to the Manner in Writing, and determin’d to endeavor at Improvement.”) (579) のである。

かくしてフランクリン少年の文章修行が始まる。まず必要とされたのは、手本となる文章である。フランクリンが選んだのは、同時代のイギリスで 1711 年から 1712 年にかけて刊行された、ジョゼフ・アディソン (Joseph Addison, 1672-1719) とリチャード・スティール (Richard Steele, 1672-1729) による日刊紙『スペクテイター』(*The Spectator*) であった。道徳・風俗・文学を中心とする幅広いトピックを論じた同紙のエッセイは、流麗典雅にして平明闊達な文体をもって、英語散文史上の一つの画期を成すと言われる。フランクリンは『スペクテイター』の合本中の一卷を入手すると、「それを何度も繰り返し読み・・・文章が素晴らしいと考え、出来ることならそれを真似てみたいと思った。」(“I...read it over and over....I thought the Writing Excellent & wish’d if possible to imitate it.”) (579)

そしてフランクリンは、以下のような作文練習法を案出する。最初に『スペクテイター』のエッセイを精読し<sup>4</sup>、要点をまとめた短いメモを取る (彼はそれを「各文の趣旨の短いヒント」(“short Hints of the Sentiment in each Sentence”)と呼んでいる)。それらの要約メモを数日間寝かせた後、自分自身の言葉で元のエッセイを出来る限り精確に復元する。最後に自分の文章と『スペクテイター』の原文を比較検討し、誤りを修正する<sup>5</sup>。

---

<sup>3</sup> The Library of America 版の「年譜」による (731)。

<sup>4</sup> フランクリンが使ったのは『スペクテイター』の 170 番から 251 番の一部であると考えられている (Lewis 269)。Lewis の論文は、フランクリンが『スペクテイター』を初めて読んでから半世紀以上経った後に書かれた『自伝』に、同紙からの影響が内容・形式の両面において深く及んでいることを明らかにしている (フランクリンが『スペクテイター』を模倣して文体改善を図ったのは 1718 年から 1720 年頃であり、『自伝』の推定執筆時期は 1771 年から 1790 年頃である)。『自伝』に見られる『スペクテイター』の模倣については Amacher 107-08 も参照。

<sup>5</sup> フランクリンは時には書き留めたメモをシャッフルし、エッセイの議論を最適な順序で再

この練習を始めてすぐにフランクリンが痛感したのは、「私には言葉の蓄えというものがなく、また、言葉をすぐに思い出して使うことも出来なかった。」(“I wanted a Stock of Words or a Readiness in recollecting & using them.”) (579) ということであった。ここでのキー・フレーズは“a Stock of Words”である。興味深いことに、The Library of America 版の註釈 (786) によると、このフレーズは初稿の段階では“Copia Verborum” (「言葉の豊かさ」) というラテン語句であったが、後にフランクリンが英語に書き直したということである。copia verborum とは、古代ローマの修辞学者・弁論教育家クインティリアヌス (Marcus Fabius Quintilianus, c. 35-c. 100) の『弁論家の教育』(*Institutio Oratoria*) 第十巻第一章に出てくる句であり<sup>6</sup>、「望むときにいつでも利用できるような、いわばある種の財産」(クインティリアヌス 183) としての語彙の蓄え、表現の豊かさを意味する<sup>7</sup>。フランクリンが『スペクテイター』を使った文章修行で獲得したのは畢竟この「財産」に他ならず、それは「人生行路を歩むうえで極めて有益」(“a great Use to me in the Course of my Life”) (578) なものとなり、その後の彼の人生を支え続けたのである。

## (2) 渡部の「原文復元法」

フランクリンの文章修行から示唆を得て「原文復元法」を考案したのが渡部である。彼の方法と実践は『続・知的生活の方法』で詳しく述べられている。

渡部は学部四年次の卒業論文作成に先立って、まとまった量の英文を書く練習が必要であると考えた。高校時代に英語の授業で教わったフランクリン『自伝』の一節を思い出した彼は、三年次の春休みにフランクリン式英作文を集中的にやってみようと決心す

---

配列出来るかどうかを試したり、『スペクテイター』の散文を韻文に書き直し、それをまた散文に戻すという練習も行っている。その際には自分の作文の方がアディソン／スティールの原文よりも優れていると思えることがあった (580) と述べる辺りは、フランクリン少年の早熟さ (あるいは少年時代を回想するにあたってわざわざそう書き添えずにはられない老フランクリンの自画自賛ぶり) に驚かされる他ないが、この練習で彼が行ったのは単純な模倣ではなく、いわば「競合的模倣」とでも呼ぶべきものであったのだろう (Seavey 25 を参照)。

<sup>6</sup> フランクリンがクインティリアヌスを読んでいたかどうかは不明であるが、彼が古典古代以来の修辞学的伝統とのつながりを意識していた可能性は高いと思われる。

<sup>7</sup> Ong は copia verborum がルネサンス人文主義者の言語教育観の中核を成す概念であったことを論じながら、copia という語の多義性を指摘している。copia には一対一で対応する英語がない。この語は、abundance (豊富さ) あるいは richness (豊饒さ)、resources (源泉)、stock (蓄え) に加えて、fluency (流暢さ) または free flow (淀みない流れ) の意味を含んでいる (Ong 1971, 29; Ong 1967, 62)。copia が最後の意味を示唆するのは、弁論家にとって発話の途中で言葉の流れが止まってしまうことは致命的であったという事実に関係している。フランクリンの“a Readiness in recollecting & using them”というフレーズは、copia のこの意味を暗示している。

る。先に見た通りフランクリンが『スペクテイター』の要約的ヒントを作り、それを手掛かりに元の文章を復元したのに対し、渡部は外国人英語学習者である自分にとってより簡便な方法を考え出した。すなわち、手本となる英文をまず日本語に翻訳し、その日本語訳を原文に再翻訳するというやり方である（後でも触れるが、原文復元法は、まずインプットすべき英文が先にある点で、普通のいわゆる和文英訳練習とは異なることに注意しておこう。）

この練習のためには癖のない文体で書かれた明快な英文が適していると考えた渡部は、大学の教員にも相談した上、十九世紀イギリスの画家・随筆家 P. G. ハマトン (Philip Gilbert Hamerton, 1834-1894) の『知的生活』(*The Intellectual Life*, 1873) を選んだ。そしてハマトンの本から自分にとって特に関連の深い、切実な興味をもって読める章をいくつか選び出し、英作文の訓練を開始したのである。渡部はその手順を以下のように説明している。

[ハマトンの英文を]日本語に訳してノートに書く。丁寧に読んで原文を頭に入れる。そして自分の和訳を見ながら英文に復元する。一回でできればそれでよし、できないばあいはもう一回やる。原文が微妙であったり、こちらの集中力が落ちているときは、三度ぐらい書き直しがあったように思う。(202)<sup>8</sup>

形容詞一つでも違っていれば全文を最初からやり直すという完璧主義に徹したために「神経が参ってしまった」(203) 渡部は、二か月ほどで原文復元法の稽古をやめてしまったと告白する。もう少し緩やかに進めていれば、「練習時間は半分で、あるいは三分

---

<sup>8</sup> 『続・知的生活方法』からの引用は全て講談社現代新書(1979年)により、ページ数を括弧内に示す。なお、ここで述べられている方法自体は渡部の独創であるわけではなく、その起源を辿れば、古典古代の弁論術・修辞学の伝統にまで遡ることが出来る。例えばクインティリアヌスは『弁論家の教育』第十巻第五章で、翻訳を作文練習の一形式として推奨し、言葉の豊かさ(copia)を身につけるためには「ギリシャ語をラテン語に言い換えること」(クインティリアヌス 249)が良いと述べている。また、キケロー(Marcus Tullius Cicero, 106-43 b.c.)も『弁論家について』(*De Oratore*)の第一巻で、「ギリシャ語で読んだものをラテン語に訳す」訓練を青年期に行ったと書いている(キケロー 93)。Kelly が指摘する通り、「言語教育の歴史は翻訳によって支配される」(Kelly 171)と言っても過言ではなく、クインティリアヌスやキケロー式の“simple translation”はほとんどの時代を通じて教えられてきたが、それを補強するかたちでルネサンス期には“double translation”の手法が広く用いられるようになり、十六世紀のイングランドではロジャー・アスカム(Roger Ascham, 1515-1568)が『学校教師』(*The Scholemaster*, 1570)において理論化した。これは「精読と双方向の翻訳を組み合わせた」(Kelly 171)練習法であり、渡部の「原文復元法」に極めて近いものと考えられる。なお、基本的に渡部式と同じ方法を「復文法」または“re-translation”として検討している文献としては、垣田 125 および羽柴 16 を参照。

の一ぐらいで済んだはずであり、したがって作文修行もずっと長く続いたはず」(203)であつたろうという。

しかし、この短期間の集中的訓練は決して無駄ではなかった。その結果渡部は、「英文でそうとう長い文章を書くのに、心理的にまったく抵抗がなくなった」(203)からである。そして「卒業論文も・・・いきなり英文で書き下ろしても、英語の書きにくさで進行がとまるということはなかった(もちろん、書く内容の論理的発展がうまくいかないで停滞することはよくあったが)」(203)というのである。この述懐には、英語で論文を書いたことがある者なら誰しも一度は経験した覚えがあるに違いない、ある種のリアルな実感が込められている。渡部はまた、後に大学院生としてドイツに留学した際にも、原文復元法で培った作文力が大いに役立ったと語っている。三百ページの博士論文を限られた期間内に下書きなしで書き上げることが出来たのは、「ハマトンで練習した長文をずらずら書く練習のおかげだった」(210)というわけである。渡部の体験談は、まとまった量の英文を書くことを身体感覚として体得するうえで、原文復元法が極めて有効であつたということを示している。この重要な点については後に再び取りあげたい。

### (3)「新・原文復元法」

次に、筆者による原文復元法の実践例を紹介することにしよう。私がここで提案したいのは、フランクリンの方法を簡易化した渡部式をさらに簡単にした、「新・原文復元法」である。

この方法が渡部式と異なるのは、学習者自身が練習素材の英文の和訳を行うのではなく、既存の日本語訳を使用するという点である。したがって、手本の選択にあたっては、原書と邦訳の両方を入手できるものを選ぶことになる。学習者自身が和訳を行うことはそもそも大変な負担であるし、相当な上級者でもない限り、自分の作った訳文が正しいものであるかどうか判断がつかかねる場合も多いであろう。そうしたデメリットを避けるためには、信頼できる訳者による質の高い翻訳を最初から用いるのが良いというわけなのである。

素材として選ぶ英語作品のジャンルは、練習者が積極的な興味をもって読めるものであれば、一般的なエッセイや小説などでも構わないが、アカデミック・ライティング能力の向上を目指す場合には、評論・批評系の本、とりわけ自分の専門領域かそれに隣接した分野の本を選ぶことが望ましい。具体例として、イギリス文学専攻の筆者が学生時代に使った本を何冊か挙げておくと、近代世界における人間疎外の諸相と自己実現の可能性を論じる Colin Wilson, *The Outsider* (Gollancz, 1956; コリン・ウィルソン『アウトサイダー』中村保男訳、集英社文庫、1988年)、シェイクスピア以後の西洋文学に現れる誠実な自我とほんものの自我の問題を扱った Lionel Trilling, *Sincerity and Authenticity* (Harvard University Press, 1971; ライオネル・トリリング『＜誠実＞と＜ほんもの＞』野島秀勝訳、法政大学出版局、1989年)、英米文学の古典を俎上に載せて様々な小説技



法を平易に解説した David Lodge, *The Art of Fiction* (Secker & Warburg, 1992; デイヴィッド・ロッジ『小説の技巧』柴田元幸・斎藤兆史訳、白水社、1997 年) などがある<sup>9</sup>。

練習の手順としては、まず原書を通常のやり方で読み進めていく。内容的に特に興味を引かれる一節や、身につけたい英語表現が集中的に現れる箇所に出合ったら、邦訳の対応箇所と照らし合わせながら丹念に読み込む。この際、必要に応じて英英辞書を引き、余白に定義を書き込むと良い。また、黙読するだけでなく、二～三回は声に出して読むべきである。一回の分量としては、三～四ページごとに一、二パラグラフを選ぶぐらいがちょうどいい。翌日（あるいは少し記憶が薄れた頃に）、邦訳だけを見ながら元の英文を思い出して全文を書き出す。そして自分の書いた英文と原文を比較し、間違えた箇所を自己添削する。最後に全文を清書し、音読する。

先に挙げたロッジ『小説の技巧』を素材にして、「新・原文復元法」の実践例を示しておこう。以下に引用する一節は、ジェイムズ・ジョイス (James Joyce, 1882-1941) の『ユリシーズ』(*Ulysses*, 1922) に即して、モダニズム小説を特徴づける語りの技法「内的独白」を、ロッジが巧みな比喻を交えながら解説している文章である。

*Ulysses* is a psychological rather than a heroic epic. We become acquainted with the principal characters not by being told about them, but by sharing their most intimate thoughts, represented as silent, spontaneous, unceasing streams of consciousness. For the reader, it's rather like wearing earphones plugged into someone's brain, and monitoring an endless tape-recording of the subject's impressions, reflections, questions, memories and fantasies, as they are triggered either by physical sensations or the association of ideas. Joyce was not the first writer to use interior monologue (he credited the invention to an obscure French novelist of the late nineteenth century, Edouard Dujardin), nor the last, but he brought it to a pitch of perfection that makes other exponents, apart from Faulkner and Beckett, look rather feeble in comparison.

Interior monologue is indeed a very difficult technique to use successfully, all too apt to impose a painfully slow pace on the narrative and to bore the reader with a plethora of trivial detail. Joyce avoids these pitfalls partly by his sheer genius with words, which renders the most commonplace incident or object as riveting as if we had never encountered them before, but also by cleverly varying the grammatical structure of his discourse, combining interior monologue with free indirect style and orthodox narrative. (Lodge 47-48; emphases all mine)

斎藤兆史による邦訳は以下の通りである。

---

<sup>9</sup> 評論・批評系以外の本では、アメリカの新聞コラムを素材にした英文読解指南書、安西徹雄『英文読解術』（ちくま新書、1995 年）なども使った。また、文学作品を用いるのであれば、南雲堂の対訳シリーズが便利である。

『ユリシーズ』は英雄叙事詩というよりは心理叙事詩である。我々が主要人物を知るのは、人物描写を読むことによってではなく、彼等の頭の中で静かに流れ続ける意識として描かれる最も私的な想念を共有することによってである。読者は、ちょうど誰かの頭の中にコードを差し込み、肉体的刺激や観念連想によって被験者の脳裏に呼び起される印象、思考、疑問、記憶、空想などを無限に録音し続けるテープをヘッドホンで傍受している格好になる。内的独白の手法を用いたのはジョイスが最初ではなく（彼は、十九世紀後期のフランス人作家エドゥアール・デュジャルダンがその元祖であるとしている）、また最後でもないが、その完成度の高さにおいて、彼の作品はフォークナーとベケットを除く他の使い手たちの作品を圧倒している。

内的独白という手法は、ややもすると物語の進行を大幅に遅らせるのみならず、些末な事物にこだわり過ぎて読者を退屈させるきらいがあるため、なかなか効果的に用いるのが難しい。ジョイスは、もっぱらその天才的な言語能力を駆使して、非常にありふれた事物を、まるで我々が今まで経験したことがないような魅力的なものに仕立て上げたり、内的独白を自由間接文体やオーソドックスな情景描写と混ぜ合わせ、言説の文法構造に気の利いた変化を与えることによって、そのような難点をうまく補っている。（ロッジ 72-73）

一回分の練習量としてはこれくらいが適当であるが（英語原文は 212 語）、長いと感ずる場合は二回分に分けても構わない。

原文と照合してみると、邦訳はかなり意識している箇所があることがすぐに分かるだろう。練習の際には、原文を復元しやすくするために、それらの意識箇所をより直訳調の日本語に直してもよい。例えば、最初のパラグラフの“**he credited the invention to...**”については、「彼は・・・がその元祖であるとしている」から「彼はその発明を・・・に帰した（彼はそれを発明したのは・・・であるとしている）」に直すことが出来るし、次のパラグラフの“**Joyce avoids these pitfalls**”は「ジョイスは・・・そのような難点をうまく補っている」を「ジョイスはこれらの陥穽を回避している」と書き替えても構わない。とはいえ、原文復元法の主眼は翻訳にあるわけではないので、この作業はあくまで必要に応じて行えばよく、むしろ日本語訳の細部に過度に拘らない姿勢を保つことが大切である。

筆者は大学院生の時、修士論文と博士論文を英語で書くためにこの訓練を数年に渡って行ったが、しばらく続けていくうちに、日本語を英語に訳しているという感覚は薄れていき、邦訳を手掛かりとして頭の中の英文を想起し、紙の上に再現しているという感覚が強まっていった。これこそ、原文復元法が通常の和文英訳練習と大きく異なる点なのである。原文復元法では、先述の通りインプットすべき英文が先にあるわけで、邦訳は元の英文を思い出すためのきっかけというか、キューのようなものとして捉えるべきなのだ。したがって、英語原文と日本語訳が全て逐語的に対応していなくても別段不都

合は生じないということになる。また、英文と和訳のズレに拘泥しないことで、和文英訳の問題点としてしばしば指摘される、日本語に引きずられた不自然な英語を書くようになるという弊害<sup>10</sup>を避けることも出来ると考えられる。

上に引用した英文を、下線部に注意しながらもう一度読んでみていただきたい。この素材からは、練習者自身の英作文に応用可能な表現をいくつも抽出することが出来る。以下にリストアップしてみよう。

- ・ become acquainted with～not by...ing, but by...ing (・・・することによってではなく、・・・することによって～を知るようになる)
- ・ ～is not the first～to..., nor the last (～は最初に・・・した～でもなければ、最後でもない)
- ・ make～look...in comparison (比較すると～が・・・に見えてしまう)
- ・ all too apt to impose A on B (残念ながらあまりに A を B に押し付けがちな)
- ・ a plethora of～ (おびただしい量の～)
- ・ render～as...as if S V (～をあたかも S V であるかのように・・・にする)

加えて、最初のパラグラフの六行目に出てくる接続詞 as の用法も見逃せない。これは「直前の名詞の意味内容を制限する節を導く」as で、自分で使うのも人に教えるのもなかなか難しい用法なのだが、文章のコンテキストに即して理解すれば身につけやすいはずだ。

こうして抽出した表現は、ノート等書き留めていつでも使えるようにしておかねばならない。そうしてストックした様々な語句や構文を、英作文で実際に使用していくことが原文復元法の眼目であると言ってよい。現在では「英語論文にそのまま使える表現集」のような便利に見える書籍が巷間に溢れているけれども、そうしたフレーズ集から人工的に摂取するのと、まとまりのある文章の中で生きたかたちで使われているのを感じるのとでは、習得した語彙をその後有効に使えるかどうかには大きな違いが出てくるのではないだろうか。

さらに強調しておかねばならないのは、原文復元法の目的は語句や構文のストックを増やして英語表現の豊かさを深めることだけではないという点である。それと同じくらい、あるいはそれ以上に重要なのは、このトレーニングを日常的に反復することによって、一定の長さのまとまりをもった英文を書くという行為を「体で覚える」ことが出来るという点なのである。先に確認した通り、復元法のおかげで「英文でさうとう長い文章を書くのに、心理的にまったく抵抗がなくなった」という渡部の言葉は、英語で「長文をずらずら書く」ことを確かな身体感覚として血肉化したということを意味する。この感

---

<sup>10</sup> 例えば、垣田 112-13、高瀬 1、橋内 3-4 を参照。



覚を体得していなければ外国語で長い文章を書くのは困難であると思われるが、原文復元法はそれを独習で身につけるための優れた手段なのである。

### 3. アウトプットのためのインプットの必要性

近年の英語教育においては、中高の授業で伝統的に「英作文」の名の下に教えられてきた和文英訳（通常は日本語の短文を英語に訳す練習）に対する反省と批判から、まとまった量の文章を書かせる自由英作文を重視する傾向が顕著に見られるようになっていく。つまり、短い和文を英語に直すだけの練習に終始する授業をやめ、「英作文＝和文英訳の等式」（橋内 4）から脱却する必要が叫ばれており、自分の考えをある程度の長さの英文で（特に論理的構造を備えたパラグラフとして）表現出来るようにすることを英作文指導の中核に据えるべきであるという認識が共有されつつあるということだ。筆者もそうした考え方には賛成であるし、後で紹介する通り授業でもパラグラフ・ライティング中心の自由英作文指導に力を注いできた。しかし、英作文の指導法または練習法に関する英語教育の文献を読んでいると、全般的に見てそこには一つの重要な視点が不足しているように思われてならない。すなわち、アウトプットのためのインプットの必要性という視点である。実際、それらの文献には、語彙なり構文なりのインプット練習に関する記述の量が極めて少ない<sup>11</sup>。

確かに、たくさん読んで英語への慣れを形成する「多読」が大切であるのと同じように、間違いを気にせずにたくさん書く「多書」という発想の必要性は認められるべきで

---

<sup>11</sup> 英作文指導法文献から一例を挙げるならば、大学英語教育学会監修『リーディングとライティングの理論と実践——英語を主体的に「読む」・「書く」』（2010 年）がある。この本の後半は、英語のライティング指導を多角的な視点から検討した九本の論文から成っているが、インプット練習に関する記述はごくわずかしは見られない。大井論文が「アカデミックな語彙習得の学習法」について簡単に触れながら用例収集のノート作りを勧めている（大井 158-59）のと、馬場論文が「ライティング能力を養成するためのインプット活動」（馬場 133）に言及しているくらいである（馬場はインプットの練習の内容について具体的に述べてはいないものの、多読と精読、速読や音読、多聴や速聴、音声 CD を利用したスピーキング活動などのそれぞれに重点を置いた指導によって、受講者のライティング能力にどのような影響が生じるのかを検討する必要性を示唆していて興味深い。）また、雑誌『英語教育』の 2005 年 9 月号「特集 発信させるライティング指導」、2010 年 6 月号「特集 これからのライティング指導～自律する学習者を育てるために」についても同じことが言える。一方、英作文練習法文献の例としては、橋内武『パラグラフ・ライティング入門』（1995 年）が挙げられる。この本は論理的なパラグラフの書き方を明快に説いた優れた入門書・概説書であるが、アウトプットの前提になるはずのインプットの訓練についてはほとんど触れていない。

あろう（小菅 12）。とはいえ、英語表現そのもののインプットが欠乏した状態でいくらアウトプットすること（「どんどん英文で自己表現する」（宮田 171）こと）を促したところで、そこにはどうしても限界があると言わざるを得ないのではないか。

中高の学習指導要領を見ても同様の疑問が生じてくる。中学の学習指導要領では、「書くこと」については、「初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする」ことが目標に掲げられ、「まとまりのある文章」・「一貫性の高い文章」を書けるようになることが目指されている（文部科学省（2016）8、19）。ここでは、「自らの発想による自己表現をする能力の育成が求められている」（望月 151）のだが、自己表現するためには相応の英語の蓄えが必要であることが見落とされている。高校の学習指導要領でも、「英語表現 I」における書く活動については、「読み手に応じて書き方を変える」ことや、文章の「様々な目的に適した書き方を選択すること」の重要性が強調されるものの、そのために必要とされる英語表現のインプットに関してはやはり何も述べられていない。「英語表現 II」になると、この点への目配りが多少は認められる。つまり、「様々な種類の文章を生徒に書かせる活動」を行うに際しては、「生徒の習熟の度合いに応じた語を用いて書かれた手本となるような文章を数多く提示し、そこから書き方を学ばせることもできる」（文部科学省（2013）31）と書かれている。しかし、手本を示して「そこから書き方を学ばせることもできる」というのはかなり漠然とした記述で、実践にあたってはあくまで現場の教員の裁量に任せるとのことなのだろうが、インプットのための具体的な指導方法については一切説明されないのである。

要するに、英作文関連文献でも学習指導要領でも十分に考慮されていないように思われるのは、インプットなくしてアウトプットなし、という言語表現の鉄則である。問題は、「自己表現」＝アウトプットするために欠かせない言葉の蓄え＝インプットをいかにして確保するのか、ということではないだろうか。

学習者が自分の言葉を使って文章を書く自由英作文の訓練は、英語表現そのものを蓄えるための練習と並行して進められるべきである。英作文指導において、両者はいわば車の両輪のように相補的な関係にあると考えなければならない<sup>12</sup>。

以上の見解に基づいて、筆者はパラグラフ・ライティングと原文復元法の指導を組み合わせた英作文授業を行ってきた。次節ではその内容を紹介することにしたい。

#### 4. パラグラフ・ライティングと原文復元法の指導を組み合わせた英作文授業の例

筆者は2012年から2016年にかけて、首都大学東京都市教養学部人文・社会系国際文化コース英語圏文化論の専門科目「英作文 I」を担当した。この授業ではアカデミック・ライティングの基礎を習得することを目標とし、パラグラフ・ライティングと並行して

---

<sup>12</sup> 筆者の立場は、次のように述べる高瀬のそれに近い。「英作文の学習は大ざっぱに言って半分が・・・新しい表現、語彙、文法などの知識入力のための時間、あと半分はそのアウトプットとしてのコミュニケーションの实地練習ということになる。」（高瀬 3）

原文復元法の指導を行った。

受講生の大半は英文学専攻の二年生で、彼らの英語力の平均は TOEIC スコアで 600 点～700 点程度である。大体五人のうち三人は、パラグラフ単位でまとまった量の英文を書いたことがない、つまり本格的な自由英作文を行った経験がほとんどない学生である<sup>13</sup>。したがって授業ではまず、主題文・支持文・結語文から成るパラグラフの構造に習熟させることに力を注ぐ。テキストは Alice Oshima and Anne Hogue, *Introduction to Academic Writing 3<sup>rd</sup> Edition* (Pearson Longman, 2007) を使用し、空間的配列、時間的順序、比較・対照、定義など様々なタイプの課題文に取り組むことで、パラグラフの「型」に則った論理的な文章が書けるようになることを目指す。

学生は毎週の授業の数日前までに課題文を E メールで提出する。授業では開始とともに、教員が添削した課題文を個別に返却していく。つまり学生を一人ずつ教卓まで呼んでフィードバックを与えていくわけだが、文法的誤りや構文・語句の選択などに関わる語学的側面と、論理的矛盾や論の展開などに関わる内容・構成面の両方に渡って、筆記による添削では伝えきれないところまで含め、教員が口頭で詳しくコメント・アドバイスしていく。所要時間は一人当たり五～七分程度である。

そして教員からフィードバックを受けていない間、学生は各自の座席で原文復元法の練習を行う。練習素材は原則的に教員が準備したものを使用する。学生には復元法用のノートを用意させ、授業内だけではなく、自宅学習としても訓練を行わせる。重要な点は、自分でも使えそうな英語表現を素材から抜き出してノートにリストアップし、課題文の中でそれらを積極的に使用するよう促すことである（教員が定期的にノートをチェックし、語句・構文の抽出を手助けすることが望ましい。）復元法ノートは学期末に提出させ、成績評価の一部に組み込む。分量としては、半期でノート一冊が埋まるくらいの練習量を標準として指示するのが良いだろう。

最後に、英作文授業に原文復元法を取り入れる場合には、オーディオブックを活用することを勧めたい。オーバーラッピングやシャドーイングなどの音読練習やディクテーションと組み合わせれば、英語表現の定着率がさらに高まることが期待出来る。課題文へのフィードバックが早めに終わった回などに適宜これらの活動を行うと良いだろう。オーディオブックのある練習素材を探すのは意外に難しいものだが、2016 年度の授業では Michael J. Sandel, *Justice: What's the Right Thing to Do?* (Penguin Books, 2009; マイケル・サンデル『これからの「正義」の話をしよう——いまを生き延びるための哲学』鬼澤忍訳、早川書房、2011 年) や、Stephen R. Covey, *7 Habits of Highly Effective People*:

---

<sup>13</sup> この事実は、馬場の次の観察の正しさを裏付けている。「学習者は中学・高校の授業での英語を「書く」経験がきわめて少なく、練習をしたとしても、その 9 割以上は単独短文の英訳練習であり」、「近年の調査では、自由英作文の経験が多少増えてはいるが、1 文ごとに独立した短文練習がまだまだ多く、まとまった長さの英文を書くことに慣れていない学生が多いことが指摘されている。」（馬場 120）

*Powerful Lessons in Personal Change* (Simon & Schuster, 1989 ; スティーブン・R・コヴィー『七つの習慣』ジェームズ・スキナー／川西茂訳、キングベアー出版、1996 年)などを用いた。

以上のような授業の組み立て方をすれば、パラグラフ・ライティング(＝アウトプット)と原文復元法(＝インプット)の訓練を同時並行的に行うことが出来、英語による自己表現力を高めながら、語彙や構文の知識のストックを増やしていくことが可能となるはずである<sup>14</sup>。

## 5. おわりに

フランクリンは、兄の印刷所の仕事が始まる前や終わった後の時間を利用して(さらに日曜日の教会の礼拝をサボって)作文の練習に励んだという。ある伝記作家がいみじくも述べた通り、この作文修業は後年文章家として大成することになるフランクリン少年にとっての優れた「自己修養課程」(“self-improvement course”) (Isaacson 28)に他ならなかったのである。フランクリン式を応用した原文復元法を通じて外国語で論文を書く力の基盤を築いた若き日の渡部についても同じことが言えるに違いない。

フランクリンと渡部が行ったような意識的なインプットの訓練を欠いたままで、自由

---

<sup>14</sup> 2016 年度前期の「英作文 I」の授業内アンケートでは、これらの両面において能力が向上したという回答が多く得られた。以下でその一部を紹介したい(全て原文のまま)。まずパラグラフ・ライティングについては、「この授業を受ける前は、英文を書く時にパラグラフの構造を意識することはありませんでした。回が進むにつれて、パラグラフの「型」に基づいてアイデアを展開する感覚がつかめてきた気がしました。」「前期の半ば頃に IELTS を受験したのですが、Writing の英作文をする時、授業でパラグラフの構成について注意されたこと(結語文は主題文をパラフレーズしたものとなるべき、主題文で述べていないことを支持文の中に持ち込まない、等)を意識して書きました。結果として、半年前に受けた時よりも Writing のスコアが 0.5 上がりました。」「今までは訳が決められている文章の英訳ならやってきましたが、そうではなくて自由に英文をつくるという経験はあまりありませんでした。そのため毎週英作文の課題を丁寧に添削していただいたことはとてもためになりました。パラグラフとしての構成を考えながら書くこと、同じフレーズや言い回しの繰り返しは避けることなど、英語で文章を書く上で大事なことをいろいろと教わりました。」といったコメントが寄せられた。また、原文復元法に関しては次のようなフィードバックがあった。「復元法は、最初のほうはなかなか慣れず、自分のやり方を確立するまで時間がかかりましたが、やっていくうちに英語の基礎の力がつく効率のいい方法だということに気がきました。単語や熟語の力が養われ、表現力がつきました。」「復元法という勉強方法は知らなかったのが初めての経験でした。テストのための勉強ではなくて、自分が身につけるための英語の勉強の仕方に幅が広がりました。」「表現の未熟さの改善に関しては、授業中に紹介していただいた原文復元法が効果的だったように思います。繰り返し行っていくことにより、表現の仕方が分からず手が止まってしまうことは少なくなりました。」「復元法も大変ではあったが、ただ漠然と英語の学習をするよりも直接頭に刻みこむように、英語が定着するのが自分でも分かった。英語の小説を読むことはあるが、小説でない *Justice* のような本だと一つのパラグラフにもしっかりとした構造があり、表現も実際に使えるものが多く、これからも活用していきたい。」



自在に英語での自己表現が出来るようになるなどということはありません。豊かなアウトプットのためには *copia verborum* が不可欠である。本稿で筆者が提案した「新・原文復元法」は、やり方を覚えてしまえば誰でも独りで取り組むことが出来るうえに、教員に過大な負担を強いることなく英作文の授業に取り入れることも出来る練習法である。有効なインプットの手段として多くの学習者と指導者に勧めたい。

#### 【引証資料】

- Amacher, Richard E. *Benjamin Franklin*. New York: Twayne Publishers, 1962.
- Franklin, Benjamin. *Autobiography, Poor Richard and Later Writings*. J. A. Leo Lemay ed. New York: Literary Classics of the United States, 1987.
- Isaacson, Walter. *Benjamin Franklin: An American Life*. New York: Simon & Schuster, 2003.
- Kelly, Louis G. *25 Centuries of Language Teaching*. Rowley, Mass. : Newbury House Publishers, 1969.
- Lewis, Janette Seaton. ““A Turn of Thinking”: The Long Shadow of the *Spectator* on Franklin’s *Autobiography*.” *Early American Literature* Vol. 13, No. 3 (1978/1979): 268-77.
- Lodge, David. *The Art of Fiction*. London: Secker & Warburg: 1992.
- Ong, Walter J. *The Presence of the Word: Some Prolegomena for Cultural and Religious History*. New York: Simon & Schuster, 1970.
- . *Rhetoric, Romance, and Technology: Studies in the Interaction of Expression and Culture*. Ithaca and London: Cornell University Press, 1971.
- Seavey, Ormond. *Becoming Benjamin Franklin: The Autobiography and the Life*. University Park and London: The Pennsylvania State University Press, 1988.
- 大井恭子「アカデミック・ライティングでもとめられているもの」『リーディングとライティングの理論と実践——英語を主体的に「読む」・「書く」』大学英語教育学会監修 英語教育学体系第10巻 大修館書店、2010年、149-165ページ。
- 垣田直巳監修『英語教育学モノグラフ・シリーズ 英語のライティング』大修館書店、1991年。
- キケロー『弁論家について』上巻、大西英文訳、岩波文庫、2005年。
- クインティリアヌス『弁論家の教育4』森谷宇一他訳、京都大学学術出版会、2016年。
- 小菅和也「ライティング指導で重要なこと」『英語教育』第59巻第3号、大修館書店、2010年、10-13ページ。
- 高瀬はま子『英作文の教え方、学び方——『ライトハウス和英辞典』を使って』研究社、1991年。



橋内武『パラグラフ・ライティング入門』研究社出版、1995 年。

羽柴正市「英作文の指導——いろいろなアプローチ」『英語教育』第 24 巻第 8 号、大修館書店、1975 年、14-16 ページ。

馬場千秋「ライティング指導でもとめられているもの」『リーディングとライティングの理論と実践——英語を主体的に「読む」・「書く」』大学英語教育学会監修 英語教育学体系第 10 巻 大修館書店、2010 年、119-134 ページ。

宮田学「学校教育でもとめられているライティング」『リーディングとライティングの理論と実践——英語を主体的に「読む」・「書く」』大学英語教育学会監修 英語教育学体系第 10 巻 大修館書店、2010 年、166-181 ページ。

望月昭彦「ライティング」『改訂版 新学習指導要領にもとづく英語科教育法』望月昭彦編著 大修館書店、2011 年、149-160 ページ。

文部科学省『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』開隆堂、2013 年。

文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂、2016 年。

ロッジ、デイヴィッド『小説の技巧』柴田元幸・斎藤兆史訳、白水社、1997 年。

渡部昇一『続・知的生活の方法』講談社現代新書、1979 年。